

東通小学校「東通科」水産教室を尻屋漁港で開催

9月28日(木)、尻屋漁港荷捌所において、東通小学校5年生を対象にした水産教室が行われました。

あいにくの雨天での水産教室でしたが、むつ水産事務所林技師から東通村の水産業についての説明と尻屋漁協浜端参事から水揚げされた水産物の流通についての説明をクイズ形式で受けました。

その後には漁船を見学し、尻屋漁協で放流を行っているキツネメバルの給餌体験と腹ビレカット標識付けを体験しました。

児童一人一人が体長6センチほどのキツネメバルの稚魚を持ち、ハサミで右腹ビレを切除しました。稚魚を片手に持ち、ハサミでヒレを切除するという初めての体験に、子供たちは最初悪戦苦闘していましたが、最後は大人顔負けの手さばぎで手際良くヒレをカットしていました。

子供たちは、「ヒレカットはすごく楽しかったです。またやりたいです」と嬉しそうに話してくれました。

最後に、標識を付けたキツネメバルが大きくなって水揚げされますようにと願いと込めて、大事そうに稚魚を岸壁から放流していました。

ヒレカット標識付けとは、切除したヒレが成長してもほとんど再生しないことを利用して、放流魚を野生魚と区別する手法です。この手法により、標識を付けて放流した魚の放流後の生き残りを明らかにすることができます。一般的にキツネメバルは、30センチほどの漁獲サイズに成長するまで10年以上かかるといわれています。



ヒレカット標識をつけたキツネメバル稚魚の放流



東通小学校5年生によるキツネメバルのヒレカット



むつ水産事務所林技師による東通村の水産業について説明

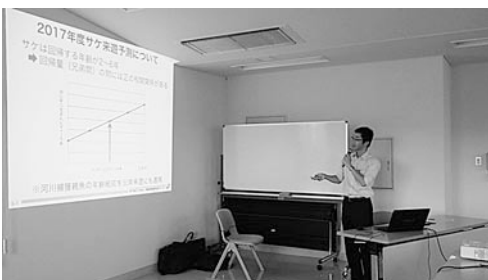
東通村漁業連合研究会「サケ漁況の見通しに係る研修会」を開催

9月22日(金)、村体育館において村漁業連合研究会会長(濱端元一)が、「サケ漁況の見通し」についての研修会を開催し、地方独立行政法人青森県産業技術センター内水面研究所 研究員 松谷紀明氏より講演をしていただきました。

サケの回帰予測は、過去の河川回帰尾数、沿岸回帰尾数と年齢構成、海況予報等から予測されますが、今年の太平洋沿岸での河川回帰尾数は10万尾、沿岸回帰尾数は94万尾の見込みであり、サケ漁の見通しは「昨年並みか昨年を下回る」と予測されることでした。

これは、今年回帰するサケの主群4歳魚の資源量が少なかったためです。サケが成長するアラスカベリング海での調査によると、来年回帰するサケの資源量は平年並みだということで、サケ漁は来年期待できるのではないかとのお話もいただきました。

当村のサケの水揚量は、昨年826トンと不振だったことから、会員は講師の説明に熱心に耳を傾けていました。



講師の松谷研究員によるサケ漁況の見通しの解説



熱心に耳を傾ける参加者達